

青森県十和田市
JR東北幹線「七戸十和田駅」から車で25分

資料提供: 1-7.11.14-17.19.十和田市新渡戸記念館 8-10.12.13.稲生川土地改良区 18.国土地理院

三本木原大規模開拓の志

江戸時代末期、広大な三本木原のほぼ中央に位置する三本木村(現在の十和田市元町)は、多い時でも40~50戸ほどで、全体として石高も少ない地域であった。さらに当地域は、冷害が多く、凶作、飢饉に度々苦しめられてきた。この三本木原の開拓を志したのが、南部盛岡藩士の新渡戸傳(にとべつとう)であった。傳は、安政2(1855)年9月工事に着手し、鞍出山穴堰(第1穴堰:熊ノ沢~矢神、約2.5km)、天狗山穴堰(第2穴堰:法量~段ノ台、約1.6km)の2つの穴堰(水路トンネル)と陸堰(開水路、矢神~三本木、約7.2km)を掘りぬいた。途中、傳にかわって嫡子・十次郎が工事の指揮をとり、安政5(1858)年4月24日に仮通水、安政6(1859)年5月4日に約4年の歳月をかけて三本木原への上水に成功した。この人工河川は、「稲生川」(いなおいがわ)と命名され現在もこの名で親しまれている。安政2

(1855)年に始まった上水工と平行して各所で開田が行われ、慶応元(1865)年には、面積約300ha、930石余の石高をあげた。

その後も明治時代から昭和初期にかけて開拓は地域の人々に受け継がれていった。昭和2(1927)年には、三本木原開拓の国営化を目指す上北大規模開墾期成会(のち三本木原大規模開墾期成会)が設立した。その顧問には「武士道」の著者として世界的に有名な新渡戸稲造(十次郎の三男)も就任し、国営化に尽力した。そして、昭和13(1938)年、ついに傳の念願であった国による開墾事業が開始された。十次郎が計画した大規模な第二上水も実現し、現在の近代的農業用水路・稲生川が完成したのであった。

受け継がれた三本木原開拓

安政6(1859)年に稲生川の上水が成功すると、「三本木平開業之記」(万延元(1860)年)に記されているように、本格的に新町の都市計画が始められた。三本木の町「稲生町」(現在の十和田市中心街)は、十二町四方基盤目状の都市計画をもとに造られていった。この計画は奥州街道(松前道)を中心軸に十二町(約1.4km)四方の範囲に町を整備するもので、道幅は本通りが8間(約16m)。この場合、1間を1.97m(6尺5寸)として計算、裏通りが6間(約12m)と、江戸時代の地方都市としてはひときわ広く確保されていた。こうした配置計画は、上杉流の兵法に基づいており、また京都の市街を模して考えられている。

稲生川の上水と開田を中心とした傳の三本木原開拓の構想をさらに拡張し、このような都市計画まで考えたのは、十次郎であった。この稲生町は区画整理と同時に街の中に稲生川から用水路を引き込み衛生面と防災面に

配慮しただけでなく、住宅区域や耕作区域、商業区域などの土地利用区分も行われており、今日の近代都市計画の先駆的な例といえる。さらに、傳と十次郎は新しい町に様々な産業を興すことを考え、各地から教師を呼び、人々に養蚕、瀬戸物焼出し、鋳物、製革などの方法を教えさせた。文久2(1862)年には稲生町に「撰駒(せりこま)市場」と呼ばれるせり市場を開設したほか、農業先進地からの技術導入など産業振興を推進し町の発展の礎とした。現在、十次郎が計画した街割りと道路計画をほぼ踏襲する形で十和田市中心街が整備されている。

明治時代に札幌が基盤の目状のグリッドを基本とした町割りとして都市計画されたことは有名であるが、その配置計画思想は、京都から三本木へ、そして札幌へといたった流れがあったとみることができる。(阿波 稔)



1.穴堰から流れる現在の稲生川



2.三本木平願新田見立図(慶応年間)



3.新渡戸傳



4.新渡戸七郎



5.新渡戸稲造



6.新渡戸開発時の稲生川頭首工(安政年間)



7.三本木開墾区域内略図(安政年間)



8.測量中の状況



9.昭和初期の水路工事



10.稲生川第一隧道改修工事(昭和4(1929)年)



11.測量・掘削に使用した器材・工部類



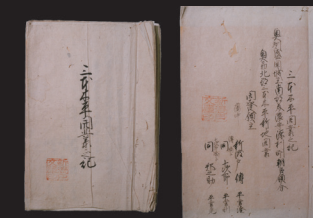
12.昭和8(1933)年ごろの熊ノ沢川掛樋改良工事
旧水路掛樋(右上)



13.現在の十和田市中心市街地



14.新渡戸十次郎



15.三本木平開業之記(万延元(1860)年)



16.瀬戸焼



17.慶応元(1865)年検地絵図



18.昭和50(1975)年撮影の
十和田市上空の航空写真



19.万延元(1860)年頃の都市計画図
(現在の十和田市中心市街地)